

国際的にも数少ない エーリッヒ・フロム研究書の一冊

その自己形成史を追求

清水多吉

本書は、国際的にも数少ないフロム研究書の一冊である。著者は、ワーマー期ド・イツ思想界のなかで、フロムがフランクフルト学派の主題である『啓蒙の弁証法』の問題圈を生きながら、いかにその主題から抜け出して行くか

の自然を「人間的なもの」（「ボテンシャルなもの」と）としたところに特徴がある。フロムは、フロイトの精神分析論のうち、「イド」の支配する「無意識」の世界をこのようにとらえたのであるといふ。著者は、スピノサを経由して、フロムの言う理性が、「自然的

文化的社会的要素を持ち込んだだ。フロムは誰よりもユンケルを尊敬していたはず。ユンケル的「集合的無意識論」のヴァーナリエーションとして提起されたものであった。スピノザ・ゲーテの自然観は、エーリーエンス派と呼ばれるユンケル・クループではむしろ一般的な通念で

か
私は、フロムの自己形成
史についての著者の追求を評
価しながらも、フロムその人
の思想については、「否」で
ある。

▶エーリッヒ・フロム
希望なき時代の希望
10・27刊 A5判320頁 本体3800円
新曜社

フロムの思想は、今日、
いつたいどれだけの
アクチュアリティーを持つのか

エリック・フロムは、戦争直後の一九五一年に訳されたあの『自由からの逃走』（原著は一九四一年）によつて、わが国の読書界にかなりの波紋を投げた思想家であった。やがて数年後の一九五八年、フロムの論敵マルクルーゼの『エロス的文明』が翻訳紹介されると、フロムの人気は急速に衰えていった。とはいっても、フロム対マルクルーゼの論争などは、ごく一部の人々が関心を寄せていただけで、当時のわが国の思想状況にはまったくかかわりのないことがたったはずである。いうのも、当時はマルクス主義全盛時代であり、精神分析的要素など顧みられることはなかったからである。それから一〇年後の一九六〇年代後半、高度経済成長下の先進国で青年学生の反乱の季節に、フランクリント学派が再評価されるや、フロム対マルクルーゼ論争も改めて評価されるようになつた。その後、この学派の国際的再評価のなかで、フロムの評価は必ずしも芳しいものではなかつた。

ランクフルト学派の主題とは、啓蒙の極まりがいかに軽々と世界で最も民主的であつたはずのワイマール共和国のなかからナチズムが登場してくることを共通体験として持つてゐるこの学派にとって、切実な問題であつた。しかし、この学派の指導者であるホリックハイマー・アドルフの言ふ『啓蒙の弁証法』の方法では、このような事態からの脱却の道はない——これが、著者の主張である。

確かに、「啓蒙の弁証法」は袋小路に陥っているとは完全化された見解である。著者はその原因を、ホルクハイマー・アドルフがカント的思考の枠内にとらわれているからであるという。それに対して、フロムはスピノザ的唯物論によってこの学派の主流派から距離を取ることになる。スピノザ的唯物論とは、絶対無限(=神)を自然としている。この自然を「力能的なもの」(=ボーランダによつて)から

「理性」であり、「イド」はまだ第一の自然である社会を含む「自然＝社会」であることを指摘する。

著者の論述の過程で、フームの自己形成史、特にアルフレッド・ウェーバーの文化社会学から、スピノザとの出会いといつまでも「文化社会学」から唯物論的文化研究への躊躇は納得がゆく。更に、このに加えて、初期フームの諸研究、ディアスボラ・ユダヤ教義の変遷の研究、キリスト教教義の変遷の研究を重ね合わせて論述していく箇所も納得がゆく。恐らく、読者諸子が納得のゆくのは、『自由からの逃走』の論述までのところであろう。しかし、戦後のフーム対マルクーゼ論争となると、著者の論述は弁解がましくなる。

フームもマルクーゼも精神分析を取りあげながらも、医学畠の人間ではない。フームのトトは「イド」をあくまで医学領域にどどめようとして、生物学的能力（性を含む）とした。アドラーやユンケは医者でありながら、「イド」に文化的な要素を持ち込もうとする。フームは唯心論者である。

さえあつたはずである。ただ、ユングのナチスへの接近のため、ホルクハイマーやアンドルノは、ユングを極端に嫌っていた。フロムの自己形成史とフランクフルト学派への加入と離反の問題は、実は、この側面が強く働いていたのではないかと思われる。

フロム心理学にみる力能と権能と自我との関係、あるいは意識と無意識の連続関係については、もっと実証研究から追求が必要であるだろう。フロムの自我の水平関係論に、相互承認論を持ち出すのは邪道である。フロムはヘーゲリアンではなかったはず。また、意識と無意識の連続性について、神話の表象など持ち出すのもおかしい。これは後追い的説明というものが、説明はフロムに即してなされねばならないだろう。

「自然的理性」、「社会」自然、「力能」と「権能」、それに「愛」と「共概念」を求めて？ これらが、今日、一体どれだけのアクチュアリティを持つというのだろうか。私はフロムの自己形成史についての著者の意見を、平

ランクフルト学派の主題とは、啓蒙の極まりがいかに軽々と世界で最も民主的であつたはずのワイマール共和国のなかからナチズムが登場してくることを共通体験として持つてゐるこの学派にとつて、切実な問題であつた。しかし、この学派の指導者であるホルクハイマーやアドルノの言ふ『啓蒙の弁証法』の方法では、このような事態からの脱却の道はない——これが、著者の主張である。

確かに、『啓蒙の弁証法』は袋小路に陥っていることは完全に説明された見解である。著者はその原因を、ホルクハイマーやアドルノがカント的思考の枠内にとらわれているからであるという。それに対して、フロムはスピノザ的唯物論によってこの学派の主流派から距離を取ることになる。スピノザ的唯物論とは、絶対無限(=神)を自然としてとらえ、この自然を「力能的なもの」(=ボテンシャルなもの)ととらえたところに特徴がある。フロムは、フロイトの精神分析のうち「イド」の支配する「無

「理性」であり、「イド」はもはや「第一」の自然である社会を含む「自然＝社会」であることを指摘する。

著者の論述の過程で、フロムの「自己」形成史、特にアルフレッド・レッド・ウェーバーの文化哲学から、スピノザとの出会い、つまり、「文化社会学から唯物論的文化研究への転換」の論述がゆく。更に、これに加えて、初期フロムの諸研究、ディアスボラ、ユダヤ教の研究、キリスト教教義の変遷の研究を重ね合わせて論述していく箇所も納得がゆく。恐らく、読者諸子が納得のゆきのものは、『自由からの逃走』の論述までのところであろう。しかし、戦後のフロム対マルクーゼ論争となると、著者の論述は弁解がましくなる。

フロムもマルクーゼも精神分析を取りあげながらも医学畠の人間ではない。フロムは「イド」をあくまで医学領域にじどめようとして、生物学的能力（性を含む）とした。アドラーやユンケルは医者でありながら、「イド」に文化的・社会的因素を持ち込んだ。フロムは誰よりもユンケルを尊敬していたはず。ユンケルの「集合的無意識論」のヴァーリエーションとして提起され

されあつたはずである。ただのため、ホルクハイマーやアンドルノは、ユングを極端に嫌っていた。フロムの自己形成史とフランクフルト学派への接近加入と離反の問題は、実は、この側面が強く働いていたのではないかと思われる。

フロム心理学による力能と権能と自我との関係、あるいは意識と無意識の連続関係については、もっと実験研究から追求が必要であるだろう。フロムの自我の水平関係論に、相互承認論を持ち出すのは邪道である。フロムはヘンリエッタ・アーヴィングではなかつたはず。また、意識と無意識の連続性について、神話の表象など持ち出すのもおかしい。これは後追い的説明というものが、説明はフロムに即してなされねばならないだろう。

「自然的理性」、「社会」、「自然」「力能」と「権能」、それに「愛」と「共通概念」を求めて? これらが、今日、一体どれだけのアクチュアリティーを持つというのだろうか。私は、フロムの自己形成史についての著者の追求を評価しながらも、フロムその人の思想については、「否」である。

国際的にも数少ない エーリッヒ・フロム研究書の一冊

その自己形成史を追求

清水多吉

理性」であり、「イド」はまた第一の自然である社会を含む「自然＝社会」であることを指摘する。

著者の論述の過程で、フームの自己形成史、特にアルフレッド・ウェーバーの文化社会学から、スピノザとの出会い、つまり、「文化社会学から唯物論的文化研究への転換」がゆく。更に、この所は納得がゆく。に加えて、初期フームの諸研究、ディアスボラ・ユダヤ教の研究、キリスト教教義の変遷の研究を重ね合わせて論述していく箇所も納得がゆく。恐らく、読者諸子が納得のゆくのは、『自由からの逃走』の論述までのところであろう。しかし、戦後のフーム対マルクーゼ論争となると、著者の論述は弁解がましくなる。

フームもマルクーゼも精神分析を取りあげながらも、医学畠の人間ではない。フームにとっては「イド」をあくまで医学領域にとどめようとし、生物学的能力（性を含む）とした。アドラーやユンケは医者でありながら、「イド」に文化的な要素を持ち込んだ。フームは誰よりもユンケを尊敬していたはず。ユンケの「集合的無意識論」のヴァリエーションとして提起されたものであった。スピノザの「自然＝社会」であることを指摘する。

さえあつたはずである。ただそのため、ホルクハイマーやアドルノは、ユングを極端に嫌っていた。フロムの自己形成史とフランクフルト学派への加入と離反の問題は、実は、この側面が強く働いていたのではないかと思われる。

フロム心理学による力能と権能と自我との関係、あるいは意識と無意識の連続関係については、もっと実証研究が必要であるだろう。フロムの自我の水平関係論に、相互承認論を持ち出すのは邪道である。フロムはヘーゲリアンではなかつたはず。また、意識と無意識の連續性について、神話の表象など持ち出すのもおかしい。これは後追い的説明というものの。説明はフロムに即してなされねばならないだろう。

「自然的理性」、「社会的理性」、「力能」と「権能」それに「愛」と「共概念」を今日求めめて? これらが今日、一体どれだけのアクチュアリティーを持つというのだろうか。私はフロムの自己形成史についての著者の追求を評価しながらも、フロムその人の思想については、「否」である。